

高校2年生のディベートの実践

筑波大学附属駒場中・高等学校 英語科
寺田 恵一

高校2年生のディベートの実践

寺田 恵一

1. はじめに

1997年度の本校の研究大会の高校の公開授業でディベートを行った。本稿は、公開授業に至るディベートの準備、研究大会当日の授業、その後の指導などを振り返りながら、今回のディベートの活動の成果と課題を考察する。

2. ディベートの目的と意義

47期生は中学3年生から担当していて、コミュニケーション活動として主にスピーチやスキットなどを実践してきた。しかし、本来コミュニケーション活動は相手の考えを聞いて自己の考えを述べるというtwo-way communicationであるべきなのに、スピーチのような活動はone-way communicationで終わりがちであるということを感じてきた。ディベートは確かに容易な活動ではないが、4技能の統合的な活動であり、論理的な思考力と即興的な応答力を育成するので、挑戦することにした。

3. 公開授業に向けて

3. 1. ディベートのテーマについて

今回のディベートの論題は「英語を大学入試からははずすべきである」(“**English should be removed from college entrance examination.**”)であった。この論題を選んだきっかけは、高英研が主催したディベートの研究会に参加したことによる。この研究会は、秋に高英研が主催する高校生対象のディベートのコンテストの準備会であり、高校の英語の教師が4、5名でこのテーマでモデルディベートを行い、その後研究協議会が行われた。教員以外に、コンテストに参加する高校生も数名参加していた。この研究会に参加した後、ほかの論題(「筑駒を男女共学にすべきだ。」など)もいくつか考えてみたが、結局この論題を選択した。現行の大学入試制度における英語の問題の意義と問題点、入試制度の改革、英語教育の意義など、高校生に是非考察して欲しい内容を、このテーマが含んでいたからである。

3. 2. 教材(資料参照)の活用

10月の中旬からディベートに関する授業を始めた。最初に、生徒に今回のテーマについて背景的な知識を与えるために資料を活用した。英語の入試廃止論として、グレゴリー・クラーク氏の論文「英語選択制の試み」、(資料1 A) 平泉試案「外国語教育の現状と改革の方向—一つの試案」(資料1 B)などを紹介し、入試存続論として和田稔氏の“Eliminating English from exams may harm students” (1997, ‘Daily Yomiuri’, 英文) (資料2)を生徒に読ませた。さらに入試改革について、中教審答申について説明した。

3. 3. ディベートの意義と手順の説明

教材の活用と並行して、ディベートについて概括的な理解をさせるために、「ディベートについて」というプリントを作成して生徒に配布して説明した。プリントの内容は次の通りである。

ディベートについて

1. ディベートとは何か。

ディベートとは

- (1) 特定のトピックに対し
- (2) 肯定、否定の二組に分かれて
- (3) 一定のルールのもとに
- (4) 同じ持ち時間で立論・尋問・反駁を行い
- (5) 相手や聴衆を説得する技術を競い
- (6) ジャッジが勝負を宣する

競技としての討論である。

discussionは、さまざまな立場から自由に意見を述べあうことであり、勝敗は争わないが、debateは、例えば、裁判における検事と弁護人の論争やアメリカの大統領選挙での候補者の論争に見られるように、「勝敗を争う議論」の意である。

(佐藤喜久雄他「教室ディベート入門」)

2. ディベートの意義

アメリカでは小学校から討論を授業に取り入れている。日本の授業でも、思考力、表現力、問題解決能力、さらにコミュニケーション能力を育てるディベートを授業に取り入れてみよう。

ディベートの意義 (Goodnight, Lynn, “Getting Started in Debate” による)

- (1) 論理的な思考力を育てる。
- (2) 即興的な応答能力を育てる。
- (3) 効果的なスピーチを行う力を育てる。
- (4) 傾聴する態度を養う。
- (5) 問題を調査して分析する力を養う。
- (6) 協力とチームワークの精神を発達させる。

3. ディベートの形式と進行

(1) 論題 (Proposition) について

A. 論題 (proposition) の特色

- (a) A proposition should be controversial (論点を持つ)。
- (b) A proposition should contain only one idea. (一つの考えだけを持つ)
- (c) A proposition should be stated as impartially as possible. (出来るだけ公平に述べる)

B. 論題の例

(a) 事実に関する論題 (Propositions of fact)

- (イ) 巨人はプロ野球の盟主である。
- (ロ) UFOは存在する。

(b) 価値判断に関する論題 (Propositions of value)

- (イ) ガンの告知はすべきである。
- (ロ) 私服にすべきである。
- (ハ) 自治会は廃止すべきだ。
- (ニ) 校則をなくすべきだ。

(c) 政策に関する論題 (Proposition of policy)

- (イ) 学制に飛び級を導入すべきだ。
- (ロ) 死刑制度は廃止すべきだ。
- (ハ) プロ野球の外国人枠は撤廃すべきだ。

(2) 肯定側 (Affirmative) と否定側 (Negative) の役割

論題は、通常現状を変革することを求めている (事実に関する論題は別だが)。肯定側は論題の採択に賛同する。(例) 校則をなくすべきだ。

肯定側は、現状には問題があるから解決すべきだとする立場をとる。肯定側は次の3点を立証する。

- ①現状の問題点と解決の重要性
- ②その解決案
- ③その案によって得られる利益

否定側は、肯定側に反対して肯定派案を論破する。従って、次のように主張する。

- ①現状に問題はない。だから、現状維持で良い。
- ②現状に問題はあるが、部分的に修正すれば解決できる。
- ③現状に問題はあるが、肯定側の解決案を実行すればより大きな問題が生じる。

否定側が、②と③の立場を取った場合対抗案（否定側独自の解決案）が必要になり、肯定側と同様に立証義務が生じる。

(3) 役員とその役割

A. 司会 1名

- (a) 開会を告げる。
- (b) 肯定側と否定側を紹介する。
- (c) 論題を紹介する。
- (d) 競技が制限時間内に終わるように、適宜時計係と連絡をとる。
- (e) 時計係の指示で制限時間を越えた発言を打ち切る。
- (f) 閉会を告げる。

B. 時計係 1名

- (a) 各スピーチの時間を計る。
- (b) 発言者に、残っている時間を「残り時間カード」で示す。

C. 審判

Ballot Sheet（ディベート判定表）に必要事項を記入し、その合計点で勝敗を決する。論者と役員以外の生徒全員が審判になる。勝敗は競技終了時に簡単な講評を添えて発表する。

(4) 発言のルール

- (a) 発言は制限時間を越えない。司会者に打ち切られたらすぐやめる。
- (b) 各チーム5名で構成する。

- (c) 立論演説とまとめは別の論者が行う。
- (d) 尋問担当は人数は自由に、反駁担当は2名とする。
- (e) 原則として反駁タイムで新しい論点を出すのは避けること。ただし、論拠 (Evidence) は出してよい。
- (f) まとめ (Summary Speech) で新しい論点と論拠は出せない。
- (g) 全員が発言するようにする。

(5) 論拠 (Evidence) について

論拠とは、主張の論点を支える根拠のことである。具体的には、ディベートの論題に関する①実例となる事実、②統計、③専門家や関係者の意見、などが用いられる。アンケートや図書館、新聞、インターネットなどで資料を検索し、搜してみよう。

(6) ディベートの進行形式

1. Affirmative Constructive Speech (肯定側立論) (3分)
2. Preparation Time 1 (作戦タイム) (2分)
3. Negative Cross-Examination (否定側尋問) (2分)
4. Negative Constructive Speech (否定側立論) (3分)
5. Preparation Time 2 (2分)
6. Affirmative Cross-Examination (肯定側尋問) (2分)
7. Preparation Time 3 (2分)
8. Negative Rebuttal 1 (否定側反駁1) (1分)
9. Affirmative Rebuttal 1 (肯定側反駁1) (1分)
10. Negative Rebuttal 2 (否定側反駁2) (1分)
11. Affirmative Rebuttal 2 (肯定側反駁2) (1分)
10. Preparation Time 4 (2分)
11. Negative Summary Speech (否定側まとめ) (3分)
12. Affirmative Summary Speech (肯定側まとめ) (3分) 計28分

(7) 各段階の発言

1. Constructive Speech (立論)

A. Affirmative Constructive Speech (肯定側立論)

(a) 肯定側は論題に賛成の立場に立つ。現状に問題 (harm) があることを指摘して、解決案を示し、さらにその案によって得られる利益を示す。

立論の時間は3分であるから、論点は3、4点ぐらいが適当であろう。論拠 (Evidence) を

どのように利用するかも考えておく

用語を定義する必要がある場合は、必ずしっかり定義しておく。あいまいだと、否定側に攻撃されることがある。

(例) 論題：“Capital Punishment should be abolished.” (死刑制度は廃止されるべきだ。)

We insist that capital punishment should be abolished. There are three reasons for it. First, we should not allow people’s lives to be deprived of under the name of law under any circumstances. The Japanese Constitution says that ...Second, the existence of the capital punishment does not necessarily reduce the number of serious crimes. For example, ... Third, it has been often proved that courts do not always give right verdicts (判決) ... For these reasons, we strongly insist that capital punishment should be abolished.

(上記の英文では、死刑制度の廃止によってもたらされる利点についてあまり言及されていないが、実際のディベートではそこをもっと深める必要がある。)

B. Negative Constructive Speech (否定側立論)

否定側立論は肯定側立論を予想して、構成する。否定側は現状を擁護する。否定側は、肯定側に対して2つの立場を取る。一つは、肯定側の論拠 (Evidence) に挑戦することである。もう一つは、肯定側の論点そのものを否定することである。

ただし、否定側は、現状に問題があることを認めて、部分的に修正すれば解決できる、あるいは、肯定側の解決案を採用するともっと大きな問題が生じると主張することもできる。この場合には、対抗案 (否定側独自の解決案) が必要になり、立証義務が生じる。

(例)

論題：“English should be removed from college entrance examinations.” (英語は大学入試からははずすべきだ。)

否定側は、現状を擁護する立場 (現状の英語の大学入試あるいは英語教育には問題ない) をとるか、あるいは、現状を認めて、部分的に修正する立場 (大学入試の改善策を示す) をとるか、あるいは、肯定側の解決案は現状よりもっと大きな問題を引き起こすことを指摘する立場をとるか、3つの選択がある。

2. Cross-Examination (尋問)

尋問を的確に行うために、相手の立論の内容に注目して、論点と論拠をメモしておく必要がある。尋問する方の人数は複数でよい。

A. 尋問の注意点

尋問は相手の立論の内容に限る。自説を展開したり、相手に反論したりしてはいけない。

B. 応答の注意点

- (a) 応答は相手の尋問の内容に関することに限る。自説を展開したり、反論したりしてはいけない。
- (b) 答えなかったり、あいまいな答えをしたりすると減点の対象になる。

3. Rebuttal (反駁)

反駁は、相手の論点や論拠の不備や欠点を攻撃して、自説を有利に導くように主張する。反論された側は、反論を受けた論点や論拠を補強して、自派の主張が正当であることを主張する。

4. Summary Speech (まとめ)

まとめのスピーチでは、立論、尋問、反駁における論点を要約して、自派が首尾一貫していることを主張することである。この段階になって、新たな論点や論拠を出してはいけない。

3. 4. ディベートに用いる表現の練習

ALTのMrs. Petersenとのチームティーチングの授業で、ディベートに用いる表現の練習を行った。“Useful Expressions for Debate” (ディベートに役立つ表現) と題するプリントを作成して生徒に配り、説明をした後で発音練習を行った。なお、このプリントは公開授業まで何度も活用した。

Useful Expressions for Debate (ディベートに役立つ表現 (松本茂「英語ディベート実践マニュアル」を一部改作)

1. Expressions for attacking the other side (相手を攻撃するための表現)

It's clear (that) their assertion is wrong.

(訳) 相手側の主張が間違っていることは明らかである。

We should pay more attention to this fact.

(訳) 私たちはもっとこの事実に注目しなければいけない。

Such a plan will cause only disadvantages.

(訳) このようなプランでは、弊害を引き起こすだけだ。

Adopting a plan will not put an end to the matter.

(訳) 提示されたプランを採択しても問題解決にならない。

We have evidence that their plan is not realistic/ hard to realize.

(訳) 彼らの計画は現実的ではないという証拠資料がある。

2. Expressions for asking questions (相手に質問をする表現)

Could you repeat your first point?

(訳) 第一のポイントをもう一度おっしゃっていただけませんか。

Can you explain that (it) ?

(訳) そのところを説明して下さい。

Could you give us some examples?

(訳) 何か例はありますか。

Did you read any evidence to prove it?

(訳) その点を証明するのに何か証拠資料をお読みになりましたか。

Are you saying that ...?

(訳) あなたは、・・・とおっしゃりたいのですか。

3. Expressions for making a point or summary (つなぎやまとめの表現)

My point is that ..

(訳) 私がいわんとしていることは、・・・

To sum up, I'm against the plan.

(訳) 要するに、私はその計画に反対です。

For these reasons, ..

(訳) このような理由により、・・・

4. Pay attention to these expressions. (間違いやすい表現に気をつけよう。)

agree

Avoid: Can you agree?

Correct: Do you agree? (同意しますか。)

Attention

Avoid: Please pay your attention to this chart.

Correct: Please pay attention to this chart.

Correct: Please look at this chart. (この表を見て下さい。)

Evidence: (数えられない名詞)

Avoid: We have many evidence to support our position.

Correct: We have lots of evidence to support our position. (私たちの立場を支持する多くの証拠資料があります。)

3. 5. ディベートのグループ分けと討論

生徒を5人一組の肯定か否定のグループに分けて、立論(1名)、尋問(2名以上)、反駁(2名)、まとめ(1名)の役割を決めさせた。尋問については、ほかの役割と重複することを許したが、それ以外の役割は重複を認めなかった。各グループで、まずそのグループの立場(論題に賛成、または反対)からの意見とその論拠(Evidence)について討論させた。次に、用紙を配布して、各役割ごとに論点のポイントを英語で書かせた。

次に、各グループの立論の生徒に原稿(英語で300語前後)を書かせ、内容を私がチェックして返却した。4クラス32班のうち、立論の生徒の半数が事前に原稿を提出した。パラグラフライティングの書式に従って書くように事前指導したが、論点が最後に来て判りにくい原稿を書いた生徒は数回再提出させた。

3. 6. 立論の生徒のスピーチ

ディベートのコンテストであるならば、ディベートの当日まで立論の生徒のスピーチを聞く機会は互いに決していないはずだが、教室のディベートはコミュニケーション能力の向上をめざしているので、早めに原稿を用意したグループの立論のスピーチを各クラスで聞くことにした。Constructive Speechを聞いた後、簡単な質疑応答を行った。

4. 研究大会当日の授業

ディベートは、即興的な活動であるので完全な準備はできない。相手の発言を聞いて、自分たちの意見をまとめることが必要になる。立論の生徒のスピーチ以外は生徒たちに準備を原則として任せていたので、当日ディベートを行う肯定側と否定側の生徒(2グループで計10名)がどのようなパフォーマンスを行うのか、授業の直前まで不安であった。

授業の最初の部分は、ウォーミングアップとして、2人の生徒にスピーチを行わせ、その後簡単な質議応答をさせた。スピーチが終わった後で、ディベートの準備に入り、3. 4. にある「ディベートに役立つ表現」を教員のあとにつけて2度読ませた。

当日、ディベートに参加したのは肯定側と否定側の2チーム10名であった。ディベートの進行形式は、プリント「ディベートについて」の3の(6)(本論文3.3参照)の通りにすすめた。司会者は帰国生の生徒が行った。

肯定側立論(英語の入試を廃止すべきという立場)のスピーチでは、論点として、(1)英語は多くの日本人にとって必要ないこと、(2)入試がコミュニケーションをすすめる英語教育の発展を阻害していること、(3)入試を廃止すれば、生徒が英語を自由な立場で勉強できることの3点をあげていた。

否定側立論(英語の入試を廃止すべきでないという立場)のスピーチでは、(1)文法の学習はリーディングをするのに不可欠であること、(2)入試から英語をなくしたら、生徒は目標を失ってあまり勉強しなくなり、さらに様々なレベルの生徒が入学するので大学は新しいカリキュラムを作成しなければいけないこと、(3)入試を廃止すると英語の教師が職を失うこと、(4)英語は私たちの日常生活で使用されていて必要なものであること、の4点をあげて反論した。

肯定側の反対尋問で、否定側の立論の第3点の論点を取り上げて、「否定側は、英語の教師が失職すると述べているが、私たちは英語の教師のために勉強しているのか。」という鋭い質問が出たが、否定側は有効に反論できなかった。ディベート全体で生徒が最も苦勞したのは、この反対尋問の部分だった。相手の質問の意味が分からずに時間が過ぎていったことがあった。反対尋問はディベートの中で最も即興的な応答が要求される部分なので、今後指導を強化すべきところであると痛感した。

否定側の反駁(2名)では、(1)受験英語は語彙を増やすのに役立っていること、(2)英語の文法力をはかるのには、現在のペーパーテストが最適なことをあげていた。一方、肯定側の反駁(2名)では、(1)文法だけを勉強するべきでなく、リズムやイントネーションが大切なこと、(2)すべての生徒が英語を勉強する必要はなく、進路に応じて大学に入ってから英語を勉強するばよいこと(グレゴリー・クラークの主張)をあげていた。

まとめでは、肯定側も否定側も、ディベートの流れをふまえて作成した内容のあるスピーチを行っていた。

ディベートに参加しなかった生徒は、聴衆として審査員として、ディベート判定表に肯定側と否定側の得点を記入した。聴衆の生徒も全体的にはよく聞いていたが、集中力に欠けていた生徒が2, 3名いた。

公開授業のディベート全体の印象として、予想以上に生徒はよく準備し、話していたと感じた。生徒の論理の展開の仕方の鋭さには感心させられた。論点の展開の仕方がパラグラフライティングのフォーマット通りに、First, ..Second, ..Third, ..と展開されていて非常に判りやすかったこと

が、印象に残った。一方、準備段階で私が強調したEvidence（論拠）については、不十分であると感じた。肯定側、否定側とももっと具体的な論拠を提供すれば、生き生きとしたディベートが展開できたと思う。生徒自身が調べるという主体的な活動が、準備段階で足りなかったと思われる。

5. 成果と課題—研究大会後の授業について

研究大会後の授業で、他のグループのディベートを行った。今回はすべてのグループが同じテーマでディベートを行ったので、概して後から行うグループの方が落ち着いていた。特に、反対尋問の部分で、相手の話がよく理解できない時に“I beg your pardon?”とか“Could you repeat what you said?”というような質問が自然にできるようになり、よりコミュニケーションな雰囲気でのディベートがすすめられるようになった。しかし、一方で立論の生徒のスピーチがあまりよく準備されていない時は、ディベート全体が盛り上がり欠けることがあった。

公開授業当日の聴衆の生徒の態度について、研究協議会で緑川先生からアドバイスを受けたので、研究大会後の授業ではディベート判定表のわきにWorksheetを付けて、聴衆の生徒にディベートのやりとりの要点を記入させることにした。(資料3)

1ヶ月半にわたるディベートの指導は私にとって大変な作業であったが、得られた成果は大きかった。不十分とはいえ、two-way communicationにつながる道が開けたように思えた。生徒の書く力や、論理的な分析力にも感銘を覚えた。同時に課題も明確になった。日常的なコミュニケーション活動、特にスピーキングとリスニングの系統的な指導の重要性を痛感した。基本的な発音やイントネーションのトレーニングの必要性を改めて感じた。

今後、ディベートを行う時は今回のような本格的なテーマのほかに、もっと軽いテーマでより簡略化したフォーマットで行うことも考えている。

6. 参考文献

Goodnight L. (1991) Getting Started in Debate. National Textbook Company.

平泉 渉・渡部 昇一 (1995) 「英語教育大論争」 文芸春秋社

上條 晴夫・池田 修 (1997) 「中学校・高等学校ディベートワークシート」 学事出版

金野 洋 (1990) 「ディベート教室・実践編」 学書房

松本 道広 (1995) 「ディベートの原理・原則」 綜合法令社

松本 茂 (1992) 「英語ディベート実践マニュアル」 バベル・プレス

Matsumura, Y., Ishi, T., Lowe, D.L. (1996) Enjoy Debating. Eichosha.

佐藤 喜久雄・田中 美也子・尾崎 俊明 (1994) 「中学・高校教師のための教室ディベート入門」 創拓社

▶▶特集 入試英語をめぐる

英語選択制の試み

グレゴリー・クラーク



私が多摩大学の学長の職についてすぐにやりたかったことの一つは、入学試験必須科目から英語をはずすことでした。ほんとうは完全にはずしたかったのですが、それをやるには文部省の指導もあり、手続き的には時間がかりすぎるので、まず選択制にしたわけです。その理由については後述しますが、これはわが校が英語などの外国語の重要性を強く意識しているからこそその決定でした。したがって、大学に入ってから、英訳(あるいは中国語)をしっかり勉強してもらう優勢は整えています。

1. 受験英語

ことばはコミュニケーションの手段。お互いに理解できなければ意味がありません。英語が話せなくてもシェークスピアが読めればいいという人もいるかもしれませんが、これは論外。また、専門分野のことを原書で読めれば話せなくてもいいという先生もいます。でも、原書を理解し、しかもかなりのスピードで読みこなすためには、結局、聞く能力が基礎になります。読んでいて耳から聞こえる感じになるのです。

日本の受験英語は明らかにこの目的からはずれた特異なジャンルでしょう。入試はペーパーテストですから、当然読み書き中心の英語で、おまけにそこで扱われる出題文は難しすぎます。なぜ難しいのかといえば、これは英語に限りませんが、過熱した受験競争のせいです。みんなが有名校に殺到する。一度の試験で大多数の志願者をふり落とさなければならない。そのためには、ありきたりの問題ではいけない。それで入試問題は、ふつうの勉強をやってきたのでは正解が出せないようなものになるのです。

中学から始まる英語教育も、当然入試競争の最終ゴ

ールを大学受験に置いています。難しいペーパーテストである入試問題を意識した、読み書き中心の英語教育がスタートします。その際、日本の先生の英語は、英語を母国語とする人から見れば正しいとは言えない発音であり、イントネーションです。12才からそれを聞いて読み書き英語を一生懸命に勉強すれば、若い頭脳にいかにも大きなダメージを与えるか、はかり知れないものがあります。頭のよい子どもほど受験英語に反感を感じるものです。電車の中で単語帳を開いて必死に覚えようとしている生徒を目にすると、ほんとうに胸が痛む思いです。(もちろん私は、中学・高校の英語の先生が優秀で一生懸命やっていることは知っています。本物の英語を開かせようとテープなども使っています。けれども何しろ時間がない。)

多くの人は、受験英語はたとえ100%プラスにならないとしても、50%くらいは役に立つのではないかと思っているでしょう。でも実際は、50どころか0でもない、マイナスです。さらに悪いことには、知的な子どもほど英語アレルギーが強いのです。

2. ことばはうた

—音、リズム、イントネーション

はじめてネイティブの英語を聞いて、学校で習った英語と随分違うとショックを受ける人も多いでしょう。ことばはうたと同じで、音、リズム、イントネーションが非常に大事です。それらが違うと全く別なものになってしまいます。はじめにヘンな音、リズム、イントネーションで頭に入ってしまうと、後で直すのは不可能に近い。その意味では、日本の場合、カタカナ英語も相当に災いしています。

人間の脳には、意識と無意識の領域があります。こ

とばは、はじめ意識の脳に入りますが、何度も聞き使ううちに無意識の脳に移されるのです。赤ちゃんがことばを覚えはじめる時と全く同じです。無意識の脳にインプットされなければ、スムーズに使えないのです。読み書き中心の勉強で覚えたことばは、意識の脳にとどまっています。だから英語を聞いても、話す場合でも、頭で考えて分解したり組み立てたりするので、時間がかかる。間に合わないのです。これでは本番のときに役に立ちません。

私はことばの問題では、若い時はフランス語、ドイツ語、あとで中国語、ロシア語、日本語などをかなりマスターしましたから、ちょっと経験があります。幸いなことに、大人になってからでも、正しい方法を使えばことばはかなりの程度までマスターできます。私の日本語も30才を過ぎてからはじめたものです。

3. いつからはじめるか

もちろん、日本人が英語を赤ちゃんと同じように覚えるわけにはいきません。人間は大人になるほど抵抗感も強くなります。しかし一方、大人になるにしたがって、学ぶ動機がはっきりして、意志的に集中することができます。経験や判断力も増えます。

考えてみれば、日本人全員が英語を流暢にマスターする必要はないでしょう。英語以外にも重要なことばがあります。ことばの勉強は、はっきりした動機のある人が強い意志をもってやらないと、成果は上がりません。正しい方法を使えば、大学に入ってから本格的にやっても決して遅くない。欧米や中国では、大学や専門学校に入ってから始めて、2～3年でかなりの日本語の使い手に育っているのを見てもわかります。18才という年齢は、いろいろな意味でちょうどいい年齢です。難しい受験英語で苦勞しなくていいのなら、中学・高校では、もっと基礎的なことをじっくり学べばよいのです。授業も余裕をもって、発音やイントネーションはネイティブの教師やテープに任せて繰り返し聞かせ、先生方は文法や内容の説明や文化的な背景を教えるなど、英語の世界に対する子どもたちの興味を引き出すような、本来の仕事に従事していただければいいと思います。

文部省は最近、小学校からの英語教育導入を検討し

ていますが、私は今の体制の中で始めることには慎重です。一つは、たとえ小学校で耳を中心としたよい教育を受けても、中学・高校と続く受験英語体制の中でうまく伸ばしていくのは難しいからです。また、その年齢では、語学の習得に不可欠な強いインセンティブや動機に欠けるからです。ただし国際交流は大事ですし、それは早い方がよい。それにはホームステイがいちばん効果的です。1週間や10日ではなく、せめて1か月半の夏休みを全部使うと、オーストラリアなら向こうの長期休暇は日本と逆ですから、うまく交換ホームステイができます。

4. 多摩大学の挑戦

多摩大学で英語を選択制にしたのは、受験英語を若い頭に詰め込むのは、私の経験からいっても、マイナスだと考えるからです。昔のあるものなら、ない方がいい。また、英語が入試で大きな比重を占めると、帰国子女に有利になり、優秀なのに英語アレルギーの子どもには不利になり、不公平です。英語を選択制にすることで英語偏重が少しでも軽減できればとも考えています。

そのかわり、大学に入ったら、英語か中国語を第二外国語として、効果的な方法を使ってしっかり勉強してもらいます。単位も4単位でなく8単位。さらに深く高度にマスターしたい学生には、英語(あるいは中国語)を副専攻として、主専攻の経営学や経済学と組み合わせて学ぶ、「ダブル専攻制度」を考えています。その場合、ことばだけでなく、その背景の社会や文化も含めたエアスタディに近いものです。勉強の仕方も工夫しています。たとえば、宿題として毎週私が自分の意見を述べた5分くらいのテープを学長メッセージとして与え、繰り返し聞かせて内容を書き取らせるのです。次の授業のときに提出し、その時はじめてテキストをもらう。英語の先生はテキストの内容や文法について説明する。試験もテープ解説です。その他にもいろいろありますけれども紙面の関係上、詳しくは最近出した本(「クラーク先生の英語勉強革命」(ごま書房))を参考にいただければ幸いです。

(グレゴリー・クラーク・多摩大学学長)

「戦争の榮華と衰頹」

昭和四十九年四月、自民党の政務調査会に「外国語教育の現状と改革の方向」と題するひとつの試案が、同会の政務調査委員平泉渉氏(参議院議員)の手によって提出された。この試案は、雑誌「読者」(昭和五十年四月号、平泉渉社)が、渡部昇一教授(土曜大衆)の論文「七四の英語教育改革試案」を掲載したことによって知られる。河氏の論争経過は次のとおり、掲載誌はすべて雑誌「読者」である。

- ・渡部昇一「七四の英語教育改革試案」(昭和五十年四月号)
- ・平泉渉「渡部昇一教授に反論する」(同五月号)
- ・渡部昇一「平泉氏は新しい、度外論者だ」(同六月号)
- ・平泉渉「明日の日本と外国語教育」(同七月号)
- ・平泉渉・渡部昇一「激突対談・外国語教育大論争」(同八月号)
- ・渡部昇一「私の英語上達法」(同九月号)
- ・平泉渉「私教・語学専攻法」(同十月号)

この論争は直ぐに熾発的区別をよび、英語専門誌、新聞など各マスコミがこれを取り上げるに及んで、国家的インパクトになった。区別は日本国内にとどまらず、ニューヨーク誌も二回にわたりこの論争を取りあげた。これは異例の扱い方である。

外国語教育の現状と改革の方向

— 一つの試案 —

(四九・四・一八)

自由民主党政務調査会

国際文化交流特別委員会副委員長

参議院議員 平泉 渉

わが国における外国語教育は、中等教育・高等教育が国民のごく限られた部分に対するものでしかなかった当時から、すでにその効率の低さが指摘されてきた。旧制中学・旧制高校を通じて、平均八年以上にわたる、毎週数時間以上の学習にもかかわらず、旧制大学高専卒業者の外国語能力は、概して、実際における応用の域に達しなかった。

今や、事実上全国民が中等教育の課程に進む段階を迎えて、問題は一層重大なものとなりつつある。それは第一に、問題が全国民にとっての問題になった

ことであり、第二に、その効率のわるさが更に一段と悪化しているようにみえることである。

国際化の進むわが国の現状を考え、また、全国民の子弟と担当教職者とは、外国語の学習と教育とのために払っている巨大な、しかもむくわれぬ努力をみると、この問題は今やわが文教政策上の最も重要な課題の一つとなっているといわねばならぬ。

一、高度の英語の学習が事実上全国民に対して義務的に課せられている

国民子弟の九割以上が進学する高校入試において、英語が課せられない例はほとんどない。また国民子弟の約四分の一が進学する大学入試においても英語が課せられない例は極めて少ない。

これらの結果として、事実上、国民子弟の全部に対して、六年間にわたり、平均して週数時間に及ぶ英語の授業が行われている。そして最終学年である高校三年における教材の内容ははなはだ高度なものである。

二、その成果は全くあがっていない

ひとり会話能力が欠如しているというのではない。それはむしろ外国語の

専門家としての特別の課程を進むものについてはじめていい得ることであって、国民子弟の圧倒的大部分についてみれば、その成果は到底そのような域にすら達していない。卒業の翌日から、その「学習した」外国語は、ほとんど読めず、書けず、わからないというのが、いつわらざる実状である。

三、その理由は何か

1 理由は第二に学習意欲の欠如にある。わが国では外国語の能力のないことは事実としては全く不便を来さない。現実の社会では誰もそのような能力を求めていない。

英語は単に高校進学、大学進学のために必要な、受験用の「必要悪」であるにすぎない。

2 第二の理由としては「受験英語」の程度が高すぎることである。一般生徒を対象として、現状の教習法をもって、現行の大学入試の程度にまで、「学力」を高めることは生徒に対してははなはだしい無理を強要することにはかならない。学習意欲はますます失われる。

3 第三の理由は英語という、全くわが國語とは語米の異なる、困難な対象に対して、欧米におけると同様な不効率的な教授法が用いられていることで

ある。

四、検討すべき問題点

- 1 外国語教育を事実上国民子弟のすべてに対して義務的に課することは妥当か。
- 2 外国語としてはほぼ独占的に英語を選んでいる現状は妥当か。
- 3 成果を高める方法はないか。

五、改革方向の試案

- 1 外国語は教科としては社会科、理科のような国民生活上必要な「知識」と性質を異にする。
また教学のように基本的な思考方式を訓練する知的訓練とも異なる。
それは膨大な時間をかけて修得される暗記の記号体系であって、義務教育の対象とすることは本来むりである。
- 2 義務教育である中学の課程においては、むしろ「世界の言語と文化」というとき教科を設け、ひろくアジア、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカの言語と文化についての基本的な「常識」を授ける。同時に、実用上の

知識として、英語を現在の中学二年終了程度まで、外国語の一つの「常識」として教授する。(この程度の知識ですら、現在の高校生業生の大部分は身につけるに至っていない)

- 3 高校においては、国民子弟のほぼ全員がそこに進学し、事実上義務教育化している現状にかんがみ、外国語教育を行う課程とそうでないものとを分離する。(高校単位でもよい)
- 4 中等教育における外国語教育の対象を主として英語とすることは妥当である。
- 5 高校の外国語学習課程は厳格に志望者に対してのみ課するものとし、毎日少なくとも二時間以上の訓練と、毎年少なくとも一カ月にわたる完全集中訓練とを行う。
- 6 大学の入試には外国語を課さない。
- 7 外国語能力に関する全国規模の能力検定制度を実施し、「技能士」の称号を設ける。

六、外国語教育の目的

わが国の国際的地位、国情にかんがみ、わが国民の約五%が、外国語、主として英語の実際の能力をもつことがのぞましい。

この目標が実現することは将来においてわが国が約六百万人の英語の実用能力者を保持することを意味する。その意義は、はかりしれない。

Eliminating English from exams may harm students

By Minoru Wada

Special: The Daily Yomiuri

The suggested removal of English from entrance exams is no solution to the problems now facing English education. What is needed is to steadily improve the standard of the English tests. Japanese students and teachers often consider English as "a major subject." This is odd because English is merely an optional subject in the curriculum of Japanese middle and high schools. However, teachers seem to feel that students should not be allowed to omit English as one of their electives. In addition, many parents are unwilling to let their children give up the language.

A large part of the reason is that English is included in college entrance exams. Although some students feel forced to take English because of these exams, most would want to learn it regardless.

If English were dropped from entrance exams, as a Central Council for Education member suggested last year, would Japanese teachers upgrade their teaching methods so that English education would change for the better at middle and high schools?

If "for the better" implies that Japanese teachers would simply start to teach English in a more communicative way, then I would be rather pessimistic.

We need drastic political and administrative initiatives to change English education. We need to extensively and intensively retrain English teachers across courses at universities.

Only if the right infrastructure is put in place, can we expect improvement. I believe that it is the responsibility of both

the Curriculum Council and the Central Council for Education to take the initiative by urging the government to act on these matters. However, I am afraid that this call to arms will result in plenty of words, but no real action.

Before we jump to the extreme of omitting English from entrance exams, we should first explore ways to improve the English tests themselves.

There are a few essential questions that need to be addressed before any improvement can be made: First, has there been any progress as a result of previous efforts to improve tests? Second, should entrance exams be achievement tests or proficiency tests? Third, what would be the biggest problem if English were removed from entrance exams?

There has been some improvement in entrance exams.

We often hear about the "backwash" effect that tests have on learning. Although backwash can be harmful or beneficial, the term is generally used in a negative sense. This is particularly true when the word is used to refer to entrance exams.

It is generally believed that entrance exams have a bad influence on English teaching. Many Japanese teachers of English use entrance exams as an excuse for not improving their teaching methods. However, I think this way of thinking is wrong.

Entrance exams and courses of study have exerted a beneficial influence on each other since the announcement of the 1977 Course of Study plan.

This plan stressed how important it was to teach reading in a communicative way. It emphasized the development of an ability to grasp the outline and the main points of a passage, instead of teaching the tech-

niques of translating Japanese into English.

In response to this improvement at the high school level, a growing number of universities stopped asking test takers to translate in their English tests. Instead, they had tests evaluate the ability to grasp the basic concept of a reading passage.

The 1989 Course of Study also had a beneficial effect on entrance exams. It urged middle and high school teachers to develop listening comprehension and asked high schools to reflect this in their English-language curriculums.

As a result, since 1989, the number of prefectural schools and universities that have included listening tests in their entrance exams has been increasing. This is a good example of how innovations in tests and curriculums have been mutually beneficial.

However, many problems remain. The 1989 Course of Study emphasized oral communication in high school, but there are few universities that evaluate oral communication skills.

For an exam to be valid, it is essential that it actually tests what it is aimed at evaluating. It is almost impossible to assess oral communication skills merely by using written tests.

I think entrance exams should be regarded as achievement tests. By this I mean those who formulate university tests should pay much more attention to what high school students are supposed to have learned.

If this is not done, there will continue to be an unfair amount of pressure on test takers. Dialogue between high schools and universities should be more constructive.

There are, however, close links between public middle and high schools whose test

questions are formulated by prefectural boards of education.

The problem is that private high schools tend to ignore the achievement levels that are expected of middle school students.

Now, let us consider the problems that would arise if English was removed from entrance exams.

The biggest problem would be a diversification of the goals that students are expected to achieve at high school and university.

If those students who did not take English in middle and high school decide they want to learn the language at college, it will be necessary to set them different goals. And if the goals are different, the syllabuses should also be different. Such students would be beginners and they would require far more elementary-level teaching than those who had started learning English earlier in their education. I am afraid that such late beginners would be too ashamed to start at such a low level and many would give up the language.

The omission of English from entrance exams might also deprive students of the chance to be exposed to the language. This would be a big loss to students who will have to live in a globalized 21st century.

If carefully devised and implemented, tests can serve as an incentive for students to study English well. This is the true significance of the backwash effect that tests can have on teaching.

What is wrong is not the testing itself, but the way it is used in the Japanese school system.

(Minoru Wada, a former senior curriculum adviser of the Education Ministry, is a professor at Meikai University.)

Online

There's a lot of computer workstations have no for trains. A play or operating system computer. Windows are examples of d

The reason for playforms is that linked together a great need for application on more than grams are called They allow you to Macintosh play Windows-based without difficulty

On the Internet playforms software that is necessary files to be sent computers with di We can say that talk to each other ferent language which allow them use something c

Home pages c protocol or http. ing and receiving translate messages used to transfer ware or graphics

Outside the usually refers to used to greet or ple. One element, is the handsh the Emperor, pi include a very handshake. Han pular would mea synchronize the

(資料 3)

Debate Ballot (ディベート判定表)

Date: _____
Proposition: (対)

All judges are asked to rate debaters on each item using a 5-point scale:
1-poor 2-fair 3-average 4-good 5-excellent

C: Constructive Speech R1: Rebuttal 1 R2: Rebuttal 2
(Debaters in the Cross-Examination are not rated.)

Affirmative Team	Aff. C	Aff. R1	Aff. R2	Total (37)
1. Analysis and reasoning (分析と推論)	(4)	(3)	(3)	(3)
2. Evidence (論拠)	(4)	(3)	(3)	(2)
3. Delivery (話し方)	(3)	(3)	(3)	(3)
Total Points (総計点)	(11)	(9)	(9)	(8)

Negative Team	Neg. C	Neg. R1	Neg. R2	Total (35)
1. Analysis and reasoning (分析と推論)	(4)	(4)	(3)	(2)
2. Evidence (論拠)	(3)	(3)	(3)	(1)
3. Delivery (話し方)	(3)	(3)	(3)	(3)
Total Points (総計点)	(10)	(10)	(9)	(6)

In my opinion, this debate was won by the (Affirmative) Team.
(Aff. or Neg.)

Judge: _____
(Signature)

Worksheet

1. Constructive Speech について

- (1) Affirmative Constructive Speech の主要な論点を書きなさい。3.
1. needless for some people it's not necessary for some people.
→ let students select!
2. college entrance exams are different from speaking
3. foreigners ought to learn Japanese.

(2) Negative Constructive Speech の主要な論点を書きなさい。3.

1. it's eliminated, the level will go down
2. it's necessary for reading high-level papers
3. ability for reading is more important than speaking

2. Rebuttal について

- (1) Affirmative Rebuttal (1と2をまとめて) の主要な論点を書きなさい。
会費 取り戻す は本言に役立つのか?
What's the evidence.

(2) Negative Rebuttal (1と2をまとめて) の主要な論点を書きなさい。

- Aff. only insists on speaking English
受験 English is useful
3. その他気の付いたことがあれば、書きなさい。